

「看護の統合と実践」の評価としての OSCE (客観的臨床能力試験) の試み
— 学士課程 4 年生の看護実践能力の現状 —

山本容子*1 山縣恵美*1 室田昌子*1 橋本颯子*2 滝下幸栄*1 吉岡友香子*1 岡山寧子*1

*1 京都府立医科大学医学部看護学科

*2 奈良県立医科大学医学部看護学科

【目的】統合分野科目「看護の統合と実践」の総括的評価として客観的臨床能力試験 (以下; OSCE) を実施した。学生及び教員評価から学士課程 4 年生の看護実践能力を明らかにする。

【方法】

1. 時期: 2011 年 11 月
2. 対象: 学士課程 4 年生 30 名
3. 「看護の統合と実践」の概要: 臨地事例を教材とした看護技術演習やシミュレーション教育の設定のもと、看護実践能力の意識化と実践力の向上を目指した。
4. OSCE の概要: 課題は、「看護の統合と実践」での事例を用いた「糖尿病患者へのインシュリン皮下注射(薬液準備)及び狭心症患者の発作時の対応」とした。評価方法は、コミュニケーション、臨床判断力等の 11 の評価領域に属する 50 項目について、3 段階で行った。評価者は、大学教員と臨地指導講師(看護師長)であった。
5. 分析方法: 評価項目、評価領域毎に学生の自己評価と教員評価の平均得点率を算出し、両者の比較に wilcoxon 符号付順位検定を用いた。教員評価は大学教員及び臨地指導講師の平均とした。
6. 倫理的配慮: 口頭で研究概要及び参加の自由、不参加の場合でも不利益が生じないことを十分に説明し同意を得た。

【結果】

1. 評価項目毎の平均得点率: 平均得点率が高かった項目は順に、「ダブルチェックを依頼できる」学生 96.7%、教員 100%、「スタッフに応援を求めることができる」、「声をかけてから訪床する」93.3%、100%等であった。低かった項目は、「訪床時の手指消毒」6.9%、10.5%であった。「不安への対応」等 17 項目において自己評価に比べ教員評価が有意に高かった ($p < .05, .01$)。「患者確認」、「必要なバイタルサイン測定」については自己評価が高かった ($p < .05, .01$)。
2. 評価領域毎の平均得点率: 平均得点率が高かった領域は順に、「看護者としての基本的姿勢」80.8%、94.6%、「コミュニケーション」71.9%、92.6%等であった。低かった項目は、「感染予防」51.8%、45.4%であった。「コミュニケーション」、「説明と同意」等 6 項目において、自己評価に比べ教員評価が有意に高かった ($p < .01$)。「感染予防」については自己評価が高かった ($p < .05$)。

【考察】

「看護の統合と実践」受講後の学士課程 4 年生では、あいさつやコミュニケーション等の看護者としての基本的姿勢、薬剤のダブルチェックや応援要請等の演習の核となる内容については身につけていることが明らかとなった。一方、各場面での感染予防行動については課題があることも伺われた。また、患者の反応に応じた対応が求められる項目では、学生評価は教員より低かった。より厳密なシミュレーション教育の設定と、OSCE でのフィードバックの充実を図ることの重要性が示唆された。

本報告は、文部科学省平成 21 年度助成事業「看護職キャリアシステム構築プラン」の一部である。